

統一

第百五十一號

明治三十年二月二十四日第三種郵便物認可（毎月一回）
發行所 東京淺草區橋本（橋本町一丁目）統一會
發行人 井上馨也編輯 井上馨也
印刷所 東京淺草區橋本（橋本町一丁目）統一會
明治三十年八月十五日發行第一號（第五十號）

日蓮上人に對する研究に就て
 本尊に關する重要教義
 十法界抄講義(第六、七回)
 立善婦人會講演
 寄事 雜篇
 宗門 史料
 宗務 廳錄事
 雜報
 教學財團公告

本多日生
 本多日生
 阪本日桓
 野老乾爲

日蓮上人に對する研究に就て

(早稲田日蓮研究會第二回講演)

本多日生

絶世の偉人は、その政事家たると學者たると將た宗教家たるに論なく、必ず多くの反對者ありて議論中傷迫害邪難を受くることは、古今東西の史實が證明して居るのであります。我日蓮上人も教敵のために甚だしく讒誣せられ、随つて上人の人格と主義とは多くの人々に誤解を懐かしめ、從來は悪感の眼より妄評するものが多数を占めて居つたのであります。然るに近年に至り世間の學者の側より公明なる批評が現はれまして、謙虚的妄説と悪感の劣情を一掃することとなり、今日にては渴仰の聲がなかくに盛んになつて上人の主義と人格とは俱に獨得の光を放つやうになつて参りました。私の眼に觸れましたものばかりでも、幸田露伴氏の日蓮上人傳、大和田建樹氏の日蓮上人傳の二書は、一般國民特に小學の生徒に上人の人格を熟知せし

ひることが、國民教育上多大の効果あること、人格完成の好模範であることを述べられて居る、又内村鑑三氏の警世雜著の中の「日蓮上人論」は最も警拔の批評であつて、上人が普通日本人に誤解せられて居るは、普通日本人が眞の日本人を知らぬからだ、普通日本人は餘りに狹量で淺見て不眞面目で小膽であるから、抱負あり達識あり熱誠ありて而かも剛膽なる眞の日本人日蓮上人を讒誣するのであると論じて、大に上人を激賞されて居る、又高山林次郎氏の日蓮上人に關する論文は、上人獨得の人格と主義とに發揮を試みて、日本人の迷夢を打破し、日蓮を有する日本國民は光榮なり、以て世界に誇るに足ると論じ、昔丞相も豊太閤も上人に比してはその下風に在るものと斷言して居る、又高島平三郎氏が日宗大學に於て講述せられたる「發生心理學上より見たる日蓮上人」は、人格の發達完成に就いて上人ほど充全なる好範は、未だ曾て他にその類を見ない實に國民の誇りであると言かれてある、この外上人に對する渴仰の聲、讚美の辭は四方より起つて参

りまして、今や上人の傳を著はす人が續出する有様でありませう。且つ青年學生の間にも上人を敬慕する人が續々出まして、その主義や人格の研究がなかくに盛んになつて居る、この會も時代の思潮に驅られて生まれ出てたる一象徴であると存じますれば、悦びに堪へぬ次第であります。

さて日蓮上人に對する渴仰や研究が、このやうに世間の側より起つて參つたのは、決して一時の好奇的現象ではない、又迂遠なる過去の史實を繼るのでもなく、又文學者の閑詩題でもない、是れは全く緊切なる要求に迫まられて起つたものと思ふ。第一には人格完成に於ける倫理上の要求よりであつて、上人の崇高にして且つ調和せる大人格を敬慕して、それを取つて自己の修養の模範とし、進んで之に同化しやうとするのである、第二には社會的徳徳の好範として之を仰ぐのてあります、それは上人は他の佛敎界の偉人とは大に趣を異にして、盛んに國家の擁護發達を論道せられ、又社會的の向上發展に貢献するがために活動し給ふた健闘

の歴史を有して居られるから、之を我に得んとする實際的要求より來つた思潮であります、第三には佛敎は高等なる大宗敎であつて今後ますます之が發揮に努むべきことが知れ渡り、而してその目的を遂ぐるには先づ浩瀚多岐なる佛敎に向つて統一的理解を要すること則ち批判的折衷主義の價値を認むるやうになり、この目的に副ふものとして上人の統一主義がその好適例であるから、上人の絶大なる主義を渴仰するに至つたのである、又この外に上人の文學的方面に對しても、その絶妙の趣味を解するものが出來た結果として、ここよりも稱歎の叫びが起つて居る、特に今や發展の國運に際會しまして國民の理想はこゝに擴大せられ、その活動奮闘の決心は隆々として進んで參りまして島國的根性を輝散するに至りましたから、この思想の結果として上人の充全なる發展主義活動主義が歡迎せらるゝのであります、斯くの如き要求の結果として、又思潮の産物として、堂々として興り來りました對上人の渴仰と研究とであつて見ますれば、この現象は決して一

時的好奇心の現象でないことが分かると思ふ、又迂遠なる過去の史實を繼るためでもなく、又文學者の閑詩題では無論ないのであります。

前來述ぶるが如く堂々たる要求公正なる思潮より來れる對上人の渴仰と研究とでありますけれども、中にはこの思潮に雷同附和して一時の好奇心に驅られて研究を試むる人もあらう、隨つて上人の人格や主義に充全なる研究を遂げずして變調なる鼓吹をなし、最負の引き倒しをやる人もあるかと思ふ、それに就いて少しく注意を與へたいのであります。

對上人の研究は大に別つて二方面があります、則ち一人は人格に就いて、二は主義に就いてであります、さて上人の人格は一言にして申さば、個人性としては智情意の調和の高度の發達であつて、又社會性としては國家主義の調和の高度の發達である、決して意思の一面に偏傾したる變調的の發達でもなければ、又狹劣なる侵略的國家主義の動作でもない、その主義は統一主義である、この統一主義は、學界には哲學と宗教の關係

に於ての統一を闡明し、心理の上には理性と感情、則ち知識と信仰との統一であつて、又宗教的客體に就いては諸神界の統一を闡明し、佛敎の中には諸佛と本佛との統一を示す、更らに行法上には觀念行と信心行とを統一して信智不二の妙信を教へ、又信仰と倫理との關係に於ては俗諦開會を説いて、信仰そのものが直ちに倫理的の力となり光となつてそこに二者の統一を明かし、又自力主義他力主義に就いては二者の妙合力を説いて、本佛と佛性との感應を教へ、又倫理の上には個人主義國家主義社會主義に於ての調和を示して、個人人格の完成はそこに國家的倫理と合し、完全なる國家思想は復た社會の向上進歩を獎勵するものとなし、斯くて活動努力の下に矛盾の觀ある各主義が不思議に妙合統一し得らるべきを示し給ふたのである。

己上は概観であります、先づ上人の人格が個人性としては智情意の調和の高度の發達であることに就いて講究致しますれば、上人の智見の方面は如何であるかと云ふに、上人が清澄山に無名の小沙彌として研學に

餘念なかりし時、智解を虚空菩薩に祈ること三週日、熱誠凝つて遂に凡血を吐き給ふ、爾來比叡の高峯に教觀の奥旨を扣き、南都に高野に三井に東寺に、其他各種の方面に於ける研鑽は、實に廣くして深く前後大藏を閲みする數回、その精練の結果獲得せられたる自解佛乘は如何、玄悟法華意は如何、上人が透明なる知見は統一的の最高完全の標準を立て、批判的に各宗の長短を闡明し、雜糅混亂の佛教をして條然たる歸着を示し給ふたのである、この統一的大知見の下には、厭世的消極的の佛教觀を一變して、超越的大樂天主教、積極的大活動主義を唱へ、又談理的の佛教觀を轉じて實際的の主義を取り、未來的偏傾の嫌ひある佛教觀を叱正して二世の濟度を明かにし、形式的迂遠の律法を破して精神的適切の倫理を發揮し、放恣傲慢の弊を捨て、熱誠信順の行法を起し、異端邪説を斷破して佛教の道統を光顯し給ふて居る。上人が龍口の悲劇、斷頭裡に座して「これほどの悦びを笑へよかし」と言ひ、佐渡の寒風積雪裡に在つて「大に悦ばし大に悦ばし」と

仰せられたは、則ち超越的大樂天主教の好範ではないか、「苦をば苦とさとり、樂をば樂とさとりて、苦樂共に思ひ合せて南無妙法蓮華經」と教へ給へるも、同じく大樂天主教の福音ではないか、「煩惱をも斷せずして菩提を成ずる道の候なるぞ」との聖訓は、復た是れ大樂天主教ではないか、又た「理具の法門散々に責めて候」と云ひ、「國を失ひ家を滅ばしなば何れの所にか世を遁れん、汝須らく一身の安堵を思はば先づ四表の靜謐を禱るべきか」と云ひ、「宮仕を法華經と思召せ」と云ひ、「日蓮は身に讀む」と仰せられたは、則ち談理的の佛教觀を轉じて實際的の主義を發揮し給ふた消息が瞭々であると思ふ、「先づ生前を安んじて更らに没後を扶けん」との聖訓、立正安國の大主張は、正しく二世濟度の理想を表白し給ふたのである、又た「二百五十戒忽ちに捨て畢んぬ」と云ひ、「小乘戒をば文殊は十七の科を出だし、如來は八種の譬喩を以て之を毀ふり給ふ、佛は又磁乳に譬へ、又蝦蟇に譬へられて候」として、律國賊論を疾呼し給ひ、「一切の大事の中に國の亡ぶる

は、第一の大事なり」と云ひ、「佛法は月の國より始まりて日の國に留まるべし、月は西より出て、東に向ひ日は東より西に行く事天然の理り、磁石と鐵と電と芭蕉との如し、誰か此の理を破ららん」と宣し給へるこの確信は、是れぞ形式的迂遠の立法を捨て、精神的實際的の倫理を唱道し給ふた躍左である、又た「徒らに遊戯し雜談して明かし暮さんは法師の皮を著たる畜生なり」と云ひ、「禪宗は下賤の者一分の徳あつて父母をさぐるが如し」と云ひ、「懶惰懈怠なるは六師外道の弟子なり」と云ひ、「天も捨て給へ諸難にも遣へ身命を期とせん」と云ひ、「何に強敵重なるも努々退く心なく恐るゝ心なかれ」と誠め給へるは、是れぞ放恣傲慢の陋弊を戒めて熱誠信順の行法を鼓舞し給ふたのである、さて前來述べました幾多の明教は、上人が知見の照す所であつて、上人が人格に於ける知的方面の發達として敬慕すべき事と思ふ、更らに上人の統一主義と大本尊の顯示とに至りましては、前に光やき後を照す大發揮であつて、こゝにその知的高度の發達を認められ

るのであるが、上人の主義に就いてその精要を採らねば、上人知見の真相と眞價とは會得せられぬであらう

(斯稿次續)

セ、本尊篇 1 總要

本多 日 生 講演
増田 聖 道 速記

本尊に關する重要教義 (承前)

(4) 受戒法式よりの考察 (三秘整尼の本尊)

前來三寶式よりの考察に就いてその三寶式を小乘より本門の三寶式迄ザツト述べましたが、只だ是だけては一の疑が起ると思ふ、それは宗祖の顯はされた本尊には三寶巴外に諸尊が勸請されてある、即ち文殊、或は舍利弗、或は多寶如來等、此の三寶以外の勸請があるに就いてはどう云ふ理由かと云ふ考が起るが、是は元と受戒の法式より來たつたのである、受戒の本尊戒壇の本尊と云ふ上からして諸尊の安置が夫れに伴つて來るのであります、故にその事を解釋するに就いて

は三秘整足の本尊を忘れぬやうにしなければならぬと思ふ、三秘整足とは祖師が顯はされた大本尊だけでなくして、宗旨の要義が三大秘法に依つて立つて居ります即ち本尊と戒壇と題目と此の三つの關係に依つて成立つて居るが、是は三にして一といふので三大秘法とも一大事法とも云つてある、故に三大秘法は分離すべきものでない、されば本尊の解釋が信仰の旨致と反してはならぬ、このことは前に述べた如に信行の行門からの觀察が必要となると同時に戒壇からの觀察が大切であつて、斯の信行門よりの觀察と、受戒法よりの觀察と、三寶式よりの觀察と、この三方面の旨致が調整せられねばならぬ

本尊
「所信の對象」
「作法及び制戒」

戒壇
「能信の意識」

特に此關係に就いて本尊はどうかと云ふに、此本尊は所信の對象、即ち信仰を捧げる其の相手方、その信仰を捧げる能信の意に就いて云へば、その所信の本尊を意識して疑はぬことである、所信と能信とが冥合して

云ふのではない十界互具の大曼陀羅とも、一念三千をふりすゝきたる大曼陀羅とも、本門教主とも、三師一證一件とも云へるが三寶式の中の本門の釋尊を除いての法本尊を取るは大に間違つて居る、澤山説がある中に於て戒壇の作法上から考ふるは有力なる教義である報恩抄に「本門の教主釋尊を本尊とすべし」と示され問答抄に「妙法を本尊とす」と教へられたは、決して矛盾ではない、戒壇作法と三寶式とは大切な要義であつてそれを動かすことは出来ぬ、これは上人主張の中心が周備し調和して居る充足的説明式であつて、餘程強い議論であると信するのであります、その受戒作法と云ふは何であるかと云へば、此作法に就ては必ず三師一證一件を立てなければならぬ、是は法華經の結經觀普賢經に起つて本門戒壇抄に御著になつてある上人の曼陀羅式はそれから起つて居るのであります、



居る所が本尊に對する信仰意識である信仰は意識し投影されて居らなければならぬ、さうなれば向ふに影つてある對手方と我が信する心とが違ふことになる、題目は能信の心に投影された意味で能信の意識である戒壇は何かと云ふと作法制戒壇は戒壇で妙法を受持する處と云ふ、三寶式からの考察は本尊の實質の上からの考察であるが、三秘整足の意義に就いては行門と戒壇の方からも見て置かなければならぬ、受戒作法と云ふことは本尊を解釋するに於て忘るべからざる要義である、

この受戒作法より見ますれば妙法蓮華經と釋迦牟尼佛が一体であると云つて附會する議論も立たぬことになり、又た諸尊を安置してある主意も理論上の十界互具や圓融論からでないことが明かになると思ふ例へば或説の一つを固執してその甲の説を取つて乙を駁する如な狹劣なる卑むべき方針を取る人があるが、さう云ふ人は宗祖の御主意を誤り多くの人を誤る、甚だ宜しくない罪惡であります、私は此の解釋以外に説明がないと

一證 (證明者)
一件 (同伴衆)

この作法は一貫して居る教義であつて觀普賢經に精しく擧げてある、即ち、
今佛に歸依し上つる唯願くば釋迦牟尼佛正遍知世尊我が和向となりたまへ、文殊師利具大悲者願くば智慧を以て我に清淨の諸の菩薩の法を授けたまへ彌勒菩薩勝大慈日我を憐愍するが故に亦我が菩薩の法を受くることを聽したまふべし、十方の諸佛現じて我が證となりたまへ、諸大菩薩各其の名を稱して是の勝大士衆生を覆護し我等を助護したまへ (錄三三頁)

とあつて、釋迦牟尼佛を以て和向とし、文殊彌勒を脇士とし、十方の諸佛を以て證明とし、諸大菩薩を以て同伴衆として解釋してある、又勸請文を唱ふる時にも先づ第一に「開述顯本法華經中一切常住の三寶」と唱へそれから諸天善神等を擧げて守護のことが願つてある、諸天善神感應道交守護せしめたまへと、各々

名前を擧げて守つて下ださいと此の結經の通り澤山菩薩の名前を唱ふるけれども、それは信仰の中心ではない、信仰の中心は戒師戒鉢が中心である、文珠已下は信仰の対象ではない、三秘整足の本尊を忘れるから或は觀念系に墮ち、或は理論に傾き、随つて雜亂勸請も起るが、それは畢竟三秘整足の解釋を忘れるからである、

本門戒鉢抄にはこの觀音寶經の三師一證一件をうけて之を本門で開顯してある、今本門の本尊は如何にも尊い組織を以て顯はれて居ることを信じて終生變はらぬ誓ひをする、今身より佛身に至る迄能く持ち奉つる法華經本門壽量品の三大秘法事之一念三千是好良樂の南無妙法蓮華經と、戒師釋迦牟尼佛に對して誓ひをする、さすれば釋迦佛より因行果徳の二法を吾人に譲り與へたまふのである、要するに受戒作法の上より三秘整足の本尊として考察したならば、三寶式に於ける疑問は茲に解決せらるゝと思ふ

十法界抄講義

八十三老比丘 阪本日桓 講演 第六回

○從第四重難云云至何出九界耶云云此の一行十行十二字の判は大に分て五段○初の第四重と云ふ文より生死難出に至る六行八字は台祖の内鑑を探り、宗祖開顯本の佛智佛眼を以て玄義の四重樂廢の文を隨祖轉用して引き、本門事觀の妙義を發端に揭て此の抄の正意を點示したる文であります○二に若爾前中と云ふ文より即成開佛也に至る廿四行は權實相待して得道無得道を論じ○三に無嫌爾前と云ふ文より壽量品已前未顯眞實哉に至る六十一行と四字は、第三重の他家の答の文の非義を擧て破斥し○四に是故記九云と云ふ文より去て感一圓果是也に至る十七行一字の文は、破述顯本し又は開顯顯本して此の抄の正意たる本門事觀の妙義を再び綿密に論じて門弟子檀那へ深く開示し○五に如是談の下の一行十字は第四重の難の總解釋の文であります上是れは之れ第四重の難の大科の文で有る、其細

科の文は隨文消釋の時に分文して聽せませす

○第四重難云云以法華本門觀心之意案一代聖教如取菴羅果捧掌中所以者何迹門大教起爾前大教亡本門大教起迹門爾前亡觀心大教起本迹爾前共亡此是如來所說聖教從淺至深次第轉迷也此の十五句七十九字は末法本化の弘經の正意たる本門壽量所顯事の一念三千廣博の十妙の法門を神力品にて結要したる妙法の事觀の義を門弟子檀那へ點示した文であります○偕此の本文を講ずるに先き立ち講講の諸子に御咄し申して置きたい事があります日講師の啓蒙卅四卷九丁に此の文を講して、今は一代の大旨一機轉人の從淺至深に約して轉迷の義を宣玉へる故に所釋の一代の説教に主つて判し玉へる趣也と有ります、此の義は甚だ不可なる事、實に文面皮相の淺近の見解にして宗祖の深意を知らざる愚談て有ります、如何となれば此の十法界は四問三答有つて、此の第四重の難に至て正しく末法本化弘經の正意たる本

門壽量所顯事の一念三千十妙廣博の法門を神力品に於て結要したる妙法五字の事觀の義を顯し給ひたる也、爰を以て發端に法華本門觀心之意を以て一代聖教を案するに菴羅果を取て掌中に捧が如しと仰られて、次き下に所以者何となればと云ふて、玄義の四重樂廢の文を隨義轉用して末法下種の妙法信唱事行觀心の意を顯し玉ひたる也、此の場合に於て在世脫益次第轉入の人の事を判して何の詮か有るや、門違ひもまた甚し、今日講師に質問せん、此の妙判に法花本門觀心之意と書せ玉ひたる觀心之意の語は何者を指して觀心之意と書せたる乎、若し入定坐禪して無始の九界に無始の佛界を具し無始の佛界に無始の九界を備へて、十界各々事の十界を互具し一念に事の三千の諸法を具したる事を觀するを指したる者なり云はば、法花本門の觀心を以てと御書し玉ふべきで有る、何が故に觀心之意と書せ玉ひたる乎、之意の二字を何と解たるや、若し此の觀心之意と云ふは、以信代惠の信念を以て、妙法を口唱し奉る事行の人に於ては觀心に代る意味有りと云

ふ義なりと言は、是れは之れ末法下種の要法にして
 在世脱益の法に非ず、何が故に一機轉入從淺至深に約
 して轉迷の義を宣べたる判なりと云ふたる耶、如何○
 ○今此の文を隨文消釋して聽すへし、初の三句廿二
 字の文の意は、法花本門の妙法信心口唱事行觀心の意
 を以て如來一代の聖教の興廢したる所以は、全く滅後
 末法本未有善の人の下種の爲めに遊ばしたる事は、菴
 羅果を取て、掌に拵げたる如く分明であると云ふ文
 なり○次に所以者何の下の十句五十一字の文を講せば
 一代の聖教を四重に興廢したる所以者何となれば、迹
 門ノ大教起し爾前ノ教亡ム文此の二句九字は權實相待し
 て興廢を論したる也、謂く迹門の開權顯實の大教を説
 き起せば、爾前跡外の權教の名が廢亡して迹門跡内の
 權實となる、雖も然、權實一致となるにはあらず、迹門
 の宗教は能開にして深勝なり、爾前の權教は所開にし
 て淺劣なり○本門ノ大教起し迹門爾前亡ム文此の二句十
 字は本迹相待して興廢を論したる也、謂く本門の開迹
 顯本の大教を説き起せば、迹門爾前の跡外の法が廢亡

して本門跡内の本迹となる、雖も然、本迹一致にあらず
 本門は能開にして深勝なり、爾前迹門は所開にして淺
 劣也○觀心ノ大教起し本迹爾前共亡ム文此の二句十一
 字は本門開顯絕待妙に約し興廢を論したる也、謂く末
 法の要法壽量所顯神力結要の觀心の大教を説き起せば
 昔迹本の教法共に廢亡して壽量所顯神力結要の妙法
 五字の中へ如來一切所有之法が攝在して毫も洩る教
 法なし、雖も然、昔迹本一代一致にあらず一機不二なり
 此の絶待不二に於て亦た相待と論ずれば、結要の妙法
 は能開にして深勝なり、昔迹本の教法は所開にして淺
 劣なり、實に不可思議の觀心の大教なる者也と判した
 る文て有ます○此は是れ如來所説ノ聖教ノ從淺至深次第
 轉迷也又此の三句十七字は上みの四重に興廢した
 る所以を結飯したる判て有ます、謂く上に擧る四重の
 興廢は、此れは是れ久遠實成の本果の如來所説の聖教、
 昔迹本觀心と從淺至深次第して興廢を説きたる所以
 は、最結句の觀心の妙法は深中の最深勝中の最勝にし
 て末法本未有善の人を教ふ爲に説き起し置きたる者也

と云ふ意味也倍轉迷の二字を講ずれば末法の本未有善
 の人々此の觀心の妙法を信念し口唱して下種し、此の
 信行事觀の大功德に酬へて忽に執迹顯本の迷情を轉じ
 て、我等が此の色心の全體が取も直さず無始事常住無
 作三身即一の佛躰也と開覺したるを轉迷と判したるの
 て有るなり、此の四重興廢の妙判の如きは獨り此の抄
 のみに判したるにあらず、錄内卅二卷二十今末法に入
 れれば餘經も法華經も詮なし(此の判文は今の抄の迹門ノ大教
 起レバ迹門爾前亡ムスト云ふ文と卷も異なる)但南無妙法蓮花經
 し、餘經も詮なし法華經も詮なしとは是れ也(此の判文は今の抄の迹門ノ大教
 起レバ迹門爾前亡ムスト云ふ文と卷も異なる)此等の類
 なるべし(此の判は此の抄の觀心の大教起れば本迹爾前
 文往々之れ有り擧るに違あらず、祖書拜讀の初注意し
 て讀むべし看過する事なかれ、且又啓蒙九ノに此の抄
 の第四重難の科文は誤りなりとて、自ら科段を設て云
 く、大に分て二とす、初は畧して在世轉入の次第を示
 し、二に但皆是真實より下は本迹一致の旨を示すと分
 文したり、此れは是れ開迹顯本絶待不思議の本迹一機
 不二の妙判て有るを、本迹一致の旨を示すと誤解した
 るを、吾先師合掌阿闍梨日受上人十法界抄自鏡篇に於

て大に破責を加へたり狂見せよ、予も又今此の四重興
 廢の文を在世轉入の次第を示すと云ふ分文の誤を破斥
 する事上に述するが如し
 ○然、如來ノ説不爲一人ノ説此ノ大道上迷
 情不除者、生死難出文此の四句廿一字は壽量所
 顯神力結要の事觀の妙法は種熟脱の三益全備の法なる
 事を判したる文也、此の文分て二とす、初の二句十二
 字は正しく三益全備を判し、次の二句九字は此の妙法
 の功能を判したる文也、然るに啓蒙に此文を消釋する
 事又誤れり、不爲一人を在世の當機益物獨得滅度の
 一機一縁の三乘を指して一人となしたり、此の四重興
 廢の玄文を引きたる事は先にも弁明したる如く滅後末
 法に約して隨義轉用したる判文なり、此の一人とは下
 種益を被る一機一縁の人を指して一人と判したる者也
 又た次々下の大道の二字を二義を以て釋し、一に大道
 は法花或は本門に属すと云ふ、二に大道は一代聖教の
 堅入經歷の教法を惣して大道となすと云ふ、此の二義
 は共に又た誤れり、此れは是れ壽量所顯神力結要の妙

法を指して大道と稱す、所謂觀心の大成を大道と名けたる者也、如何となれば此の妙法は無始本有常住の大道なる者なれば妙法を稱して大道と判したる也、三世の諸佛十方の薩埵此の妙法の大道を踏み行ふにあらざれば寂光の寶都に至る事能はず、故に妙法を大道と判したる也、今汝等が執著する一部唯述の法華經本迹一致の妙法の如きは本無今有の小溪にして述佛述化の人の踏む險路なり、況や爾前の諸教の險路をや、且汝本門を以て或義に屬したるは佛の金口を恐れず、宗祖の宗旨を無みする罪人也○今此の判文の正義を辯明して聽せん、然の一字は上みの觀心の大成たる下種の妙法の文を承けて然と簡びたる語なり、謂く然るに如來此の觀心の大成を説き起したるは末法下種の一機一緣の人の爲めのみに妙法五字の此の大道を説きたるにはあらず、此の妙法は種熟脫三益全備の大道の妙法なれば此の人先の下種を培養の爲に信唱し淳熟せしめ、無始本具の佛界緣起の九界の生死を出て、無始本具の佛界に立ち還りて脱益の利益を得せしむるが爲めに説き起

したる觀心の大成也と判したる文なり○迷情不除者生死難出文謂く一切衆生此の本門觀心の妙法五字の大道を踏み行ふにあらざれば執述謗本の迷情を除く事あたはず、左すれば一切衆生無始本具の佛界緣起の九界の生死を離れて無始本具の佛界に立ち還る事は出来ぬ者て有る、今我が弟子檀那等此の觀心の大成妙法五字の大道を踏み行きたれば九界の生死を出て佛界の寶都に立ち還る事薩羅果を掌中に捧げたるが如く明かなる者也と云ふ意味の判文也

第七回

從若爾前一至即成圓佛也此の廿四行一字は權實相待に約して爾前無得道法華一經の成佛を論したる判文て有ます、此廿四行一字の判文を分て二とす、初め若爾前中と云ふ文より得益不同也に至る十行五字は爾前の諸經の無得道を判じ、二に然今法華と云ふ文より即成圓佛也に至る十三行十四字は法華一經の成佛を判す、此は大科の文て有ます、其細科の文は隨文消釋の時に分文して聽せませす

○若爾前中有八教者頓則華嚴、漸

則三昧、秘密不定、亘前四味、藏則亘於阿含方等、通是方等般若、圓別是則先四味、中除鹿苑說、如此八機各各不同、教說亦異、四教教主亦是不同、當教機根不知餘佛、故解釋云、各々見佛、獨在其前、此の文又分て二とす、若爾前中の下、不知餘佛に至る十六句七十八字は根性不識にして説教及び得益の差別なる旨を判す、二に故解釋の下、三句十四字は引證也、借此の判を隨文消釋すれば若とは簡公語なり、何に者に對し何を簡びたるやと云ふに、法華經の一佛乘の機に對して爾前の教々の差別の機を簡びたるのて有ます、謂く法華經は十界互具を説て十界ともに一味平等にして善惡邪正を擇ばず唯一佛乘の人と成て成佛の素懷を遂げたれども、若し爾前四十餘年所説の諸經を論ずれば十界互具を説かざる隔歴未融の教なれば八教が有ります、其八教と申すは化儀の四教と化法の四教と此の八種の教を八教と云ふのて有ます

其化儀の四教の中の頓教と云ふは則ち華嚴經のことと有ます、華嚴經を頓教と名けたる所以は頓とは初也と申して方便の漸教を用ひず最初から大乘圓教を説きたるがゆへに頓教と名づけたるて有ます、故に頓則華嚴と判したるなり、次に漸は則三昧と申すは漸とは漸次と申して、鹿苑の酪味にて眞空の理を證し、方等の生靈味に於て彈斥せられ、般若の熟蘇味にて淘汰して、此の通りに三昧を漸々次第に經歷したる故に、漸則三昧と判したるのて有る、次に秘密とは秘密教と申して釋尊が身口意三輪不思議の大神通力を以て隱覆密説し諸の衆生をして互に相知らしめず、漸教の利益を得せしむるも有り、頓教の利益を得せしむるも有りて、人法ともに互に相知らざる説法を秘密教と申す、次に不定とは不定教と申して維摩經に佛以一音演説法衆生隨類各得解と説て、如來不可思議の神力を以て漸教の一音を演説し給ふに頓教の利益を得る衆生も有り、又頓教の一音を演説し給ふに漸教の利益を得る衆生も有りて、同聽異聞して得益不定なるを不

定教と申しせず、偕て秘密教も同聽異聞て不定教も又同聽異聞なれども、秘密教の同聽異聞は人法互不相知として、同聽異聞しても相互に人も知らず法も知らざるのて有る、不定教の同聽異聞は人知法不知として、來集の人は知れども所聞の法を知らざるが不定教の同聽異聞て有ます、此の秘密不定の法門は頗る廣博にて、一席二席の講義にては説き盡す事には參りませぬのみならず、此御抄に對しては差したる必用もなきこと、認ましたから唯名目斗りを辯じて聽せたのて有ます、此の秘密不定の二教は乳味の華嚴經にも酪味の阿含經にも生薑味の方等經にも熱薑味の般若經にも説て有るから、秘密不定、互前三四味と判じたるて有ます、此れさてが化儀の四教て是れより化法の四教を判じたるのて有ります、化儀とは化導の儀式で、願の儀式、漸の儀式、秘密の儀式、不定の儀式有て教化を施すなり、次に化法とは化導の法轉で藏通別圓の四教が法轉である譬へば化法の四教は醫師の用ゆる藥味の如く、化儀の四教は醫師の方劑の如くなる者で、願の方劑には別圓

の藥味を用ひ、漸の初の方劑には三藏の藥味を用ひ、漸の中の方劑には藏通別圓の藥味を用ひ、漸の終の方劑には通別圓の藥味を用ひ、秘密不定の方劑も又復藏通別圓の藥味を用ゆるのて有ります、其所て化法の四教の藥味ありと雖ども化儀の四教の方劑なければ藥味を施す事ならず、化儀の四教の方劑のみありても化法の四教の藥味がなければ九界六道の病者に治療を加へる事が出来ません、車の兩輪鳥の兩翼の如くなる者で有ます○化法の四教の文を消釋しますれば、藏とは三藏の事、此の教には經藏、律藏、論藏と云ふ三藏を説きたる故に三藏教と名づけたるのて有る、此の教は鹿苑十二ヶ年の所説の四阿含經と、方等十六ヶ年の所説の内に説きたるが故に藏、互三於阿合方等と判じたるのて有る、次に通とは通教の事、此の教の法門は前の三藏教にも通じ後の別教圓教にも通じ亦是三乘の人共通して四諦十二因緣六度の法を修行しまするから通教と名づけたるて有る、此の教は方等十六ヶ年の内にも般若十四ヶ年の内にも説て有るから通、是、方等

般若と判じたるのて有る、次に圓とは圓教の事、此の教は空假中の三諦を相即して一諦即三諦三諦即一諦と、圓融微妙に説きたる教なるが故に圓教と名づけたるのて有る、別とは別教の事、此の教を別教と云ふは教理智斷行位同果の八法が、前の三藏教通教の二教に別異に説き、後の圓教と別異に説きたる教なれば別教と名づけたるのて有る、此の別圓二教は華嚴の乳味、方等の生薑味、般若の熱薑味の三味の教の中に説て、鹿苑の酪味の中にのみ説て有りませぬから、圓別、是、則先四味、中、除三鹿苑、説と判じたるのて有る、是れ迄が化法の四教を判じたるて有る、如此化儀の四教の標と化法の四教の異と此の八機各各不同なれば、所説の教法も亦た隨て異なり、所説の教が機なるゆへに能説の教主も異なりて、三藏教は丈六四八の劣應身で、通教は十里百億相多身大の佛で、別教は盧舍那報身佛で、圓教は毘盧遮那法身佛で、此の通り亦不同て有るから、如此、八機各各不同教説亦異、四教、教主亦異、是、不同と判じたるのて有る、八機各各不同なるが故に

三藏當教の機根は丈六四八の佛を知て、通教等の餘佛を知らず、乃至圓教の當教の機根は三藏教等の餘佛を知らず、其證據には解釋に、其當教當教の所化の機根は、各々當教の能説の佛が獨り我が前に在して我が爲に法を説き給ふと思ふて、他にも佛在して他の衆生の爲に法を説き給ふ事を知らずとある、依て當教、機根不知、餘佛、故、解釋云、止、一ノ卷、四丁、各々見、佛、獨、在、其、前、上と引證して判じたるのて有る、是の判文の意は所化の衆生の機根不同なる故に説教も不同得益も不同にて未顯眞實の教なる事を論じたる文て有ます○人天五戒と云ふ文より得益不同也に至る十五句七十六字は、七方便の人の得益不同を判じて、上の判文の意を明了ならしめたる文て有る、今此の文を隨文消釋しますれば、人間界の果報を感ずるには、五戒と申して不殺生、不偷盜、不邪淫、不安語、不飲酒とて、此の五つの戒を守りて犯さざれば人間界の身を感じ、天上界の果報を感ずるには、十善戒と申して五戒に不惡口、不兩舌、不綺語、不貪、不瞋、不

變の五つを加へて是れを十善戒と云ふ、是を守りて犯さざれば天上界の果報を感ずるから、人天五戒十善と判じ、苦集滅道と云ふ四諦の法門を修行すれば聲聞乘の果報を感ず、無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、生、老、死と云ふ十二の因縁の法門を修行すれば縁覺乘の果報を感ず、穢戒忍進禪惠と云ふ六度の法門を修行すれば菩薩乘の果報を感ずるから、二乘四諦十二菩薩六度と判じたる有る、三僧祇百劫の間六度の法門を修行すれば三藏經の菩薩の果報を感ず、動遙塵劫の間無生の四真諦を修行すれば通教の菩薩の果報を感ず、無量阿僧祇劫の間三諦隔歷の法門を修行すれば別教の菩薩の果報を感ず、三諦圓融の法門を修行すれば一生の中に六根清淨の位より初任の位に登つて、正覺を成じて圓教の菩薩の果報を感ずるから、三祇百劫或動遙塵劫或無量阿僧祇劫圓教菩薩初發心時便成正覺と判じたる有る、左すれば事柄が分明に知れます、所化の衆生の機根が各別なれば其各別の衆生を教化する説教なれば、佛の所説に感通

別圓の四教の差別がある、教に差別がある其教によつて修行を立る者なれば、從て修行に差別がある、修行に依て果報を感ずる者なれば從て得果に差別がある、此則爾前の諸教の所化の根性が不融にして千差萬別なれば是故衆生得道差別とて必竟隨他意方便の説にして未顯真實無得道の教也と破斥したる有る、故に明知機根別故説教亦別、教別故行亦別、行別故得果別也、此則各別得益不同也と判じたる也

○從然今法華一至即成圓佛也此の三十四句二百十一字は法花一經の成佛を判じたる文有る、此の文分て三とす、初め然今法花と云ふ文より十界互具の法門を説きたる事を判じ、二に是時思惟と云ふより二乘三惑に至る十八句一百九字の文は爾前の諸經に於ては十界互具の法門を明さざる故に眞實の斷證證理に非ざる事を判じ、三に眞實證時と云ふ文より即成圓佛也に至る九句五十七字は、再び法華經は十界互具を説きたれば眞實の斷證證理たる趣を判

す上分文て有る○然と今法華方便品説欲令衆生開佛知見爾時八機并惡趣衆生悉皆同或釋迦如來互具五眼一界十界十界互具二百界一文然の字は爾前の諸教の得道差別を簡ひて法華の唯一佛乘を顯したる語て有る、今此の文を消釋せば爾前は得道差別なれども、然も法花經はしからず、今の法花經方便品に欲令衆生入於開佛知見佛界也と説て、能具の九界の衆生をして此の衆生に本來具足したる所の佛の佛智佛眼を開き顯さんと欲して、十界互具の妙法を説せ給ひたる爾時に、化儀化法の八教差別の機類并に四惡趣の衆生が法華に來至し、悉く皆な同じく成釋迦如來(是れ一佛乘の人となつて十界共に差別なし)互具五眼此の互具五眼と申すは十界互具の異名て有る、地獄餓鬼畜生修羅人間の五道の眼を肉眼と云ふ、天上界の眼を天眼と云ふ、聲聞緣覺の二乘の眼を慧眼と云ふ、菩薩の眼を法眼と云ふ、佛の眼を佛眼と申して、十界の事て有る、偕て上は佛界より下は地獄界に至るまで一界に十界を具したれば、十界には百界を具したる事

を欲令衆生開佛知見と説たる有ると云ふ判文なり○是時思惟爾前諸經諸經、佛自界二乘、二乘又々不具菩薩界、如三界、人天、成佛、望絶不不知二乘、菩薩斷惑、即是自身、願惑、二乘四乘智慧、似脫四惡趣、互隔二界、而皆是一、轉、昔經二乘但思斷除自界見思、不知斷三六界見思、菩薩亦如此、雖欲斷盡自界三惑、不知斷三六界二乘二惑、此文の十八句一百九字の文を消釋すれば、是時とは法華經述門に於て十界互具の法門を説きたる是時なり、此の時に爾前四十餘年所説の諸經の事を思惟に、諸經能説の諸佛は自界に二乗を具足せず所化の二乘も自界に又菩薩界を具足せず、三界の人間界天上界の如きも自界に佛界を具足せざれば、成佛の望も絶へて二乘や菩薩の斷證證理は即自界の斷證證理なる事を知らず、三乘四乘の(三乘とは菩薩の三乘也四乘とは三乘)智慧は(二乘の智は一切智也菩薩の智は一切智也)智慧を加へて四乘と云ふ、智慧は(道種智也佛の智は一切種智也)能く見思の煩惱を摧破して四惡趣の生死の身を脱れたるに似たりと雖ども、人天は人天て二乘は二乘て菩薩て七方便の人々互に自界と他界を隔てたれば、從て得

道も差別したるて有る、而も法華經は十界互具の妙法を説きたれば、十界一味平等にして一絲不二也、昔の爾前の經の在坐の二乗は但自界の見思の煩惱を斷じ三世界の生死を出てたりと思ふて、他の六道界の見思を斷じて自界と共に生死を出づる事を知らず、菩薩も又た如此、自界の見思塵沙無明の三煩惱を斷じて九界の生死を出てたりと欲と雖ども六道界と二乗界との三惑を斷じて自界と共に九界の生死を出づる事を知らざる也と判じたる文て有る

眞實證時、一衆生、即十衆生、十衆生、即一衆生也、若不斷六界見思者、不可斷二乘見思、雖如是、說迹門、但是改三九界情、明十界互具、故即成圓佛也、此の九句五十七字の文を消釋すれば、上に述べたる通り法華迹門方便品に欲令衆生開佛知見と説て、十界互具を明したれた、十界は一味平等となりて十界の人孰れの人にもせよ眞實に斷惑證理の時は十界の衆生が悉皆斷惑證理するので有る、然るに二乗が自界の

見思を斷じて若し他の六道界の見思を斷ずる事が出来ぬとならば、自界の見思の煩惱も斷じたるのではない矢張元との凡夫て有ると迹門では如是説くと雖ども是れは此れ權實相待して爾前の諸經の人の根性の不徹を破斥したる者て有る、若し本迹相待する時は、迹門は但九界の法界を斷せずして其迷情を改轉した即圓佛となりたりと云ふので、是れも又た間違つた咄して有る本門の所談は十界ともに無始事常住無作三身即一報應事常住と談じたれば、改むべき迷情も無く、十界ともに當體全是の妙法の法界にして眞實の一大圓佛なる者也と本迹相待し迹門の改轉の成佛を破斥したる判文て有る

(付言) 本講義は前後十回に渉るも、本號より一時に二三回分を列載し、次第を以て完結せしむべし



寄書欄

左に掲ぐる一篇は前號誌上に報道せる姫路立善婦人會に於ける講演にして、會長野老乾爲師より寄稿に係る

立善婦人會講演

野老乾爲

一、立善婦人會の發會式に臨みて
 本日は立善婦人會發會式でありましてかくも盛なる式典を舉行することゝなりましたのは誠に悦ばしき次第であります、まづ會の名目を一寸申すれば、立といふ字は字の通りたるといふこととであります、儒教では立志と申しまして實行の意味が含蓄されてあります東京へ行きたいと思ふて東京へ行つたならばとにかく其志、丈は立つたのである、たゞ志した計りて行かなかつたならば如何なる困難があつたにもせよそれは志が立たなかつたのであるだから立と云ふ字は世の中の總ての事に大切なのであります、此寺は冷しい

本日の發會式は誠に盛會で二百五十名已上も集まつたとて歡ぶがそれは此本堂が建立といふて立つてるから此結果をみる事が出来たのである、若しも此寺が立つて居ないとしたならば、材木があつても組立て、ないとしたりならば、どうして此冷しさと賑はしさと歡ばしさとを御互に感ずることが出来ませうぞ、然り決して出来ませぬ、冷しき風はいたづらに吹て居て我々はかほどの悦びを受けることはとてもないのである、又雨天の日材木が寝て居るとしたならば我々は安樂に寝ることは出来ない、雨をしのぐことは出来ないのであります、かく考へ来りまするの時、立つといふことが大切であることは一層明かになると考へます、とこゝで立善婦人會は何を立て何を目的として進んで行くかと申しますと善を立て最大善てふものを認識して現世に大活動を試み向上の一路を猛進しなければならぬといふ自覺し實行する會なのであります、皆さんも御承知の如く善とか悪とか小善とか大善とかを區別いたすことは、ヘボ學者では到底正確な判断を下すとは出

來ない善と申しましても中々と範圍が廣い、譬へば小供に甘いものをやるのも一つの善事であるが余りやりすぎますと却てそれが悪いこととなる、なせならば先方の母親は直にあの人が喰はせ過ぎるからこんな病氣に罹つたのだと怨む様なことがおこる、こちらはやつたら善いと思ふてやつたのであるから喜ばれなければならぬ、喜ばれるのが當然であるに却て怨まれるとはつまらないことで、この逆まなことが出来るというものはよく考へて着手しない結果であるといはねばなりません、からして總て物事は深く考へてしなかつたならば、これは善いこれは結構なことと思ふてなした事柄が却て悪事をなしたことになるのでありますからして、善事をしたいと志を立てた時間違のない様に正確に綿密に考へてやらないといけません、そうでないならば折角發心してやつてれりながら何にもならないこととなる計りてなく、却て罪惡を構成することになつてはつまらないことであります、呉れくも深く考へてやらなければならぬといふことを注意いたし

て置きます。

さて人は豪傑人にならうと思ふたならば、其豪傑人がやつた足跡を辿たどつて行くことが大切であるが如く善事をなさうと思ふものは先づ世界で善人として一番優れたエライ方はドナタであるかと考へるのが最もよからうと思ひます、西洋の哲學者プラトリー、アリストトル、シヨフベンハウエル、かくの如き人々が一番の組であらうか、否基督であらうか、否々これ等の何れもはなか／＼印可を與へらるゝ資格が全く備はつていない、何となれば此等の方々は時代の進運につれて亡ひなければならぬ、一時的人物として認めらるゝにいたるからであります、萬古一貫不朽の大真理大哲理を包含して居らないからであります、畢竟理性の満足を與ふことが出来ないからであります、然らば一番の方は誰人かと云へば、どうしても釋迦牟尼世尊でなければ一番の名に當てはまる方はないのでありますこれは決して獨斷ではありませぬ、といふものは此御佛の廣大なる智見と云ひ、無限の慈悲と云ひ、無邊の

御力用といひ誰も肩を較べるものがないてはありませぬか、あるならば堅からでも横からでも理論からでも實際からでも言ふて御覽なさい、釋尊の身口意三輪の妙化によつて、之に反する總てのものは悉くこつば微塵に粉碎せらるゝのであります、釋尊を研究すればする程、自己の智見がひらければなる程、此本佛釋迦牟尼世尊の尊き所以が分るのであります、如何に世が文明になり智見が廣大になり非常なる發達進歩をいたしましても、プラトリーや、アリストトルや、シヨフベンハウエルや基督やの様に衝突したり對立したり別離してしまつたりする様なことはございませぬ、そこで我々は世界で一番優れて在すところの此本佛釋迦牟尼世尊の足跡を踏んで行かなければならぬといふことはなるのであります、そして其足跡は何處にあるかといふことを最も正確に意識しなければなりません、若し正確に意識しなかつたならば現世には不幸の人として暮さなければならぬのみならず未來永遠の最大不幸をも受けなければならぬのであります

る、からして凡そ大事の中には凡そ善事の中には此事を先決問題として知ることが最もよいと思ふ、否善いのであります、其足跡をたつねまするに畑や田地をどんなに一生懸命さがしたとてもうんなどころにはございませぬ、決して／＼ありませぬ、畑には犬の足跡か下男の足形ぐらゐのものである、そんな處には斷じてない、即ち御佛の足跡は此經典にあるのであります、之を看さへすれば判明るのであります、なにも六ヶ敷いことはない、經典の意義内容を會得して其通りに實踐躬行するそれが即ち足跡を踏んで行くことなのである、と云へば、それは經典を見分ける力のなき人はどうするかと云へば、それは經典を咀嚼する學識ある人善智識の人を信じさへすればよいのである、其人を通じて世界で一番優れて在す本佛釋迦牟尼世尊に歸命すればよい此上もなくよいのである併し此正しき信仰即ち妙信、圓信、大信を得るまでが中々容易なことではないのである、此正しき信仰にはいりさへすればもうしめたものだが、はいるまでが困

難だ、危いものだ、幾多の疑もおこる、疑問なんかた
くさんおこれば起る程よいのではあるが、解決といふ
ことにはならずして大抵の人は行き詰まつて最後は煩
悶、懊惱せつばつまつて不可解、華嚴の瀧か淺間の噴
火口なんどいまはしいことが出来る、疑問の中にも
こふいふのがある、佛教は一佛が御説きなされたもの
だ、だからどの經典でもよい、何の宗旨でもよいは
ないかなどと骨なしのこんにやくの様に氣骨のない無
主義無定見なことをおめざせぬ云ふものがある、よ
くもまあそんな日本の恥さらしの様なことが云へるも
のだと思ふ、戦後の大日本帝國は新進一等國の地位に
入つたのではないか、今時そんな幼稚なことを言つて
居て呉れては困るじやありませんか、一佛が御説きな
された經典、それには一貫して居るところがある、正
統正系といふものがある、統一がある、分裂は決して
許さない、日本の佛教界はなせこんなに分裂して居る
のでありませうか、茲一番考へものである、一人が言
つた言葉の中に矛盾があつたならばそれはまあ氣チガ
人となり、未來は佛果を莊嚴することが出来るのであ
ります

二、人は活動すべきものなり

世間には一日醒解してやれ、これ安心だと腰をす
へる人々がよくあります、私はそれはよくないと思ひ
ます、安心も氣ぬけのした様な安心はいけません、昔
時まだ電信も電話も出来なかつた頃の戦争状態を考へ
ましても分ります、電信柱のかわりに十町か二十町
毎に人を立たして置いて其用を辨じたことがある、それ
が短距離ならばなんともないが、いざ長距離となりま
すと當時の武士たる傳達者は主人の命令大事といへる
觀念が中々強かつたから大抵途中で倒れて仕舞ふ様な
ことはなかつたが、其かわり其手紙を渡してやれ安心
と思ふと、はや氣息が絶たといふのが通例であつた
から、受取る方に於きましては早くからちやんと其用
意をして待構へて居りまして、もう傳達者が来る刻限
であると思ふ頃にはゲンコを固めて居たのである、て
来たならば本人がやれ、と安心するまでに直様コッ

ヒだと多くの人は申すでありませう、現今日本の佛教
の様に分裂した幾多矛盾あるものを佛教といふならば
恐れながら釋尊はやはり氣の違つた仲間入りをなさ
なければなりません、どうして釋尊にうんな矛盾が
あつてたまるものですか、分裂して居るのは透明な智
見の無い論師人士の僻説僻論のいたすところて釋尊に
は少しも關しないことである、遮莫法華經本門壽量品
が教へる既に吾々御互が信ヒ奉れる本佛久遠實成大
恩教主釋迦牟尼世尊は、堅に三世に高く、横に十方に
普く、救濟の御手を垂れ玉ひ光りを放ち玉へるいとも
尊き師善逝であります、それで本會は此本佛釋迦牟
尼世尊に歸命し奉りました、其廣大なる智見の一分を
受け、其無限の慈悲の一分を受け、其無邊の御力用の
一分を受けまして現在社會を感化せしむるのでありま
すから、諸氏は自己の幸榮を喜ぶと同時に一層奮勵努
力いたされまして、一人でも多く此尊き此正しき信仰
に引入られんことを熱望いたします、さすれば佛子
の本分を全ふすることが出来まして、現世には模範の

ンと固きゲンコでなぐるのである、そうすると失敬な
ツ、無禮者めツ、トイふ新生氣、まけない氣がそこに
勃然として起る、ろこて水を吞ませると其傳達者がシ
ヤンとして来る、助かる、トこうなるのであります、
宗教は恰もゲンコと水の如きものである、常に此人生
社會に生氣を興へ、死せんとするものを蘇生せしめる
活力のあるものである、人が此世に處しまするも前
に述べた傳達者と同じことでありまして、五十年は五
十年、十年は十年、一日は一日、ろれは長いか短いかの
違ひ丈で結局は同じことであります

人は消極的にやれ、と安心する傾きがありますが、
これはよろしくありません、人は安心しても積極的
に安心しなくてはなりません、前者の安心は静的です、
後者の安心は活動的です、人は常に此活動的の心に住
して心をひきしめ總ての仕事を務めて行かなければな
らないと私は考へるので御座います、そこで身體も心
も働かせ働かせる程よろしいのであります、活動し
ない人は呼吸をして居ても既に死んで居るのである、

怠惰の歩みはあそいで、貧乏速かに其跡を追て來ます、怠惰なる頭腦は悪魔の工場である、怠惰は心の錆である、怠惰は生者の墳墓である、怠惰は艱苦の源である、安逸より起る辛苦は堪へられませぬ、一日の苟安は數百年の大禍ともなるのであります、人は須く活動しなければなりません、身心共に活動すればする程宜しいのであります

皆さんは谷間に流れて居る水に就て考へて御覽なさい、潮水溶々として山間に反響して居ります、水は盛んに活動して居ります、此水は決して腐つては居りませぬ、此水で酒を醸造しますと實に色あざやかなまことによき一等賞受領の酒が出来ます、灘の酒はみな新様な水を用ひて居ますからよい酒が出来るのであります、井戸の水はいかによいからといふても、それはとても岩間をくぐつて來た水にはかなひませぬ、借て岩清水はかほどに清くありまして若しこれを玻璃器か陶器に汲み入れて置きまして、一週間か十日経つてから見ると御覽なさい、ボツボツが孵化して居るとか手もつけ

するものである、向下するものはやがて闇黒にさまよふ者である、迷界に沈淪する者である、最大苦痛を感ぜざるべからざるものである、煩惱と菩提、生死と涅槃、苦縛と解脱、これ吾等の一念に向上と向下とが具有して居る何よりの證據で、瞬間の心的作用が必然的に來す結果であります、ですから人は此一念に於ける善惡二心のさばき方と二心を持続すると持続しないとの如何が、人格修養上至大なる關係があるのであります、からして吾々はかく日常の考へを深ふして活動するところが大切であらうと考へます

次に夫婦そのものの活動を少しく述べませう、夫は外に出て活動し、妻は内に在りて活動しなければならぬ、然るに夫は外に出て活動するが妻はいつも内に寝て計り居ては困る、また活動して居ると申しましても今日は芝居、明日は遊山、辨當をこしらへるに日も又足らぬといふ様な活動は悪い活動である、たまた家に居るかと思ふと、髪のことや自分の着物ややれ帯がどうだの下駄がどうのとそんなことばかりにうき身を

られぬ、腐れ水と化して居るでありませう、してみれば自然の水が常に吾々に偉大なる感化を與へて居るのであります、吾々は此水を見ても大に活動せんければならぬからうと思ひます、

其活動には向上的活動と向下的活動とがあることを知らなければなりません、吾々の胸間に居る瞬間の一念に、譯が分るといふこと、分らぬといふことがある、換言すれば賢と愚が具有してある、世界の智者學者をも閉口せしめる様な鮮明な智見とも具有して居れば、没分曉漢野次馬連をも此一念の中には具有して居るのである、向上向下的の別れ道始めは一步否一分一厘の違ひであるが、幾程もなく千里の差となるのであります、自己一念の活かせ様如何によりまして崇高なる人格をつくることも出来れば、また最も下賤しき人とも墮落するのであります

善人は向上するものである、向上するものは光明を希ふものである、悟の境界に到達せんとするものである、最大幸福を得んとするものである、悪人は向下

やつして居るのでは困る、内助の効は夫をして最も快活に十分の活動を外部に實現せしめることとならねばならぬ、源濁れば流れ清からずである、夫が如何に傑物であつても妻が悪いと十分の力あるものは八分の力しか現はせないこと、なるのは當然であります、和氣霽々たる家庭を形造ることは妻の力大に與つて力があるのであります、霽々たる家庭が夫の活動の源ならば、従つてまた妻は夫の活動の源であるといふてもよいのである、されば妻たるものは、自己は妻である夫の活動の源であるてふ自覺の下に、身心共に常に活動させていたゞきたいのであります

三、完全なる宗教に依り與へられたる自覺に基かざるもの、活動は人間の眞價を知らざる者なり

平岡聯隊長は何事にも御熱心で有ることは常に私共も耳にいたして居りますが婦人會には最も熱誠をこめて居られるそうである、それは妻は夫の活動の源であるから軍人に本分を盡させるべく根本的に力を添へなければならぬ、思召して居られるからであります

う是は軍人のみではありませぬ、僧侶でも農家でも
 商業家でも工業家でも政治家でも教育家でも何れにも
 せよ同じこととあります、女子は氣の弱いところがあ
 つていけませぬが、此世へ生れて来た以上は山來れ越
 へん海來れ渡らんのが概がなければなりませぬ、一寸の
 困難に遭遇して意志がひるむ様では旭日東天の勢ある
 我大日本帝國の女子とは云はれませぬ、如何なる困難
 如何なる迫害に遭ふても夫を扶けんが爲には誓根鎧飾
 を排して意志を貫徹するの女子とならねばなりませぬ
 しかし世界の模範となるに足るべき大日本帝國の女丈夫
 夫となるには、こゝに教へといふものに就いて深く考
 へることが最も大切である

其教へには現世教と未來教、或は過現末に亘つて缺陷
 なき成立的大宗教等種々ありますから、それをよく會
 得しなければなるまいと思ひます、西洋には先づ現世
 教としては希臘教宗教としては基督教を見ねばなりませ
 ぬ、東洋では現世教としては先づ儒教、宗教として
 は佛教を見るのがよからうと思ふ、これ等は何れも數

げましたる信仰はこゝに根據より破壊せられるのであ
 る、是れは實に近代宗教哲學の研究に伴ひまして起り
 ました愉快なる現象でありまして、日蓮上人が六百數
 十年の昔時に於て大聲叱りたされたる本佛論の
 眞價は今日に至りまして漸く其光輝を放たんとしつゝ、
 あるのであります、彼の基督教に於ては貧民救助なり
 慰安なり中々と慈善事業等に活動して居りますから兎
 に角あれ丈の勢力がありませぬが、根幹の教義そのもの
 が完備して居ませんから吾々の理性を満足せしむるこ
 とが出来ない、基督教徒が時代遅れの傳道者を養成し
 つゝありと云ふのも根幹の教義に於て缺陷があるから
 である、優れた傳道者、勝つた傳道者が出来れば、そ
 れはもう基督教徒ではなくて高遠にして玄妙深理なる
 佛教を奉ずるもの、仲間入をして居るのである、つま
 り基督教は不完全の宗教であると云ふことになる、そ
 うすると吾々の理性をも満足することが出来る完全
 なる大宗教は何かといへば、せうしても佛教でなけれ
 ばだめであります

千年來國民の思想を支配し來つたものでありまして、
 何れの教へも中々尊い、そこに缺陷ある宗教即ち不
 完全の宗教と缺陷なき宗教即ち完全なる宗教とを見分
 けて置く必要があるのであります

現世教としての儒教は仁義禮智信等五倫五常を教へて
 は居るが、生は何處よりか來り死は何處にか去ると問
 はれた時返事が出來ない、生を知らず何んぞ死を知ら
 んと答へなければならぬ、人は何處へ用たしに參り
 ましても自己の家は何處で、寝るところは何處と知つ
 て居ればこそそこに安心があるのである、自己はどこ
 へ歸るのであるか、何處に寢室が在るかも分らず迷ひ
 子になりさまよふて居てはどうして安心することが出
 來ませう、況んや他人に安心を與へるなどはとても出
 來るものではありませぬ、然らば基督教にて安心が得
 らるゝかど考へますと、やはり安心は得られないト云
 ふものは基督教は神の恩寵を基礎として篤信して居る
 宗教でありますけれども、其眞神の体相なるものを確
 立することが出來ませぬ、だから恩寵を説きて築き上

猶太教や、回教や、波斯教や、波羅門教など兎に角
 世界の一宗教として認められては居ますが、これ等は
 佛教の草鞋取り位のものである、尤も佛教と申しまし
 ても現代の如く分裂に分裂を重ねて居る、日本の佛教
 をさすのではない、姉崎博士もいへるが如く法華經よ
 りながめたる統一的の佛教をさすのである

- 佛陀觀に於ても
- 宇宙觀に於ても
- 人身觀に於ても
- 教法觀に於ても
- 行法觀に於ても

總て法華經に於て整正統一されてありますから、此法
 華經より見たる佛教が世界的宗教、普遍的宗教、不朽
 的宗教でありまして、巖然として世界幾多の宗教に頭
 角を現して居る所以であります、無始より光を放ち來
 つた所以、尙無終の永劫に亘つて光を與へ力を與へ愈
 々益々人の崇敬するところとなる所以であります
 人類が生々發展して行く其處に悉く中正不偏の明教が

垂れてあるのてありますから、此法華經本門壽量品より見たる……換言せば日蓮上人の眼より見たる佛教はまことに高くなるので御座います、日本の婦人が「教へ」なるものを考へるの時、東洋と西洋との教へ如何三千年來人類の思想を支配し來りし完備せる教へ如何を考へるならば、最後はどうしてもこゝまで來て此高き信仰にはいらなければ、世界の大舞臺に打て出んとする大日本帝國の女丈夫と認める譯には參りませぬ、小兒を養育するにいたしましても此完全なる宗教の廣大なる智と情と意を離れては、完全なる人物をつくることは到底不可能事てあります

今後の大日本帝國は東郷已上、大山已上、伊藤統監已上、西園寺公已上、智情意に於て最も傑出せる人物を欲求して居るのであります、それには智の世界、情の世界、意志の世界を共に支配することが出來るところの完全なる宗教に據らなければなりません、其完全なる宗教とは日蓮上人の眼より見たる統一的佛教でなければならぬ、此大宗教の高き所以を意識して自己が

完全なるものとなるばかりでなく愛兒も立派なものに育て上げ、また一人でも多く此高き御教への感化を受ける様に活動せねばなりません、かくてこそ始めて日本人なるもの、品性が一層崇高になつたと云ひ得らるのである、重量がより重くなつたと云ひ得らるのであります、而して我大日本帝國が世界の舞臺に活動し、平和の戰爭にも正義を楯として常に勝利を博しつゝ進まねばなりません、世界文明の中心となり模範とならねばなりません、それには日本婦人の精神が完全なる宗教の感化を受けて、より以上に剛健にならねばなりません、世界の模範たる大日本帝國の女丈夫とならねばなりません、崇高なる品性を世界に示さねばなりません(了)

寄書 雜篇

在米日本宗教家の現状と在留民の輿望
北米 南山 樵 夫
米國在留幾十萬の同胞士女が、其健全ならざる社

會にありては、有徳多識なる宗教家の出て、これ等民衆の上に福音を傳へ資益するを要す、之れ蓋し刻下の急務なり

既に基督教徒は在留者矯正の一策と、斯教布教の一方便とをめぐらして、或は青年會を組織し、又は教會を設立して、社會の改進を圖るの間に、母國日本佛教の眞宗一派が、遙かに來りて教陣を張り、以て吾人同胞に宗教の本義殊に佛教の信仰を教へんとして、多大の費用を抛ち積極的方針を取りて、社會の暗黒面を照らさんとしつゝあるは、教家の天分を完ふし、刻下の急要を充たすものとして予の感謝する所なり

予渡米後茲に一年有半、而して宗教界の現状に關しては、大絃小絃見聞に殆んど十中の七八を確知することを得たり、就中眞宗佛教青年會の活動の一端を擧げて母國識者の考察を仰かんと欲するものなり

今眞宗一派の傳道者を見るに、彼等は己れの天職を忘れて在留邦人の手に組織せられたる某々會に強いて出入せんとし、鎖々たる名利に汲々として殆んど教會を忘れ、經典を抛ち、重きを俗界の名譽職に致し、領事館に願使せられ、區々たる日本人會に支配されつゝあるもの頗る多し、是の如きは俗の俗にして醜の醜

なるもの、到底、社會を利導し民衆を感化するに勝へざるものと謂ふべし

それ宗教家は徳を以て自から高うし、衆民は勿論、領事も團體も皆之れを善導するの概なくんばあらず是れ豈に偉大なる名譽の職にあらずや、惜い哉彼等は今毫も是れを解せず、却て俗衆の爲めに輕蔑せられ、その左右する所となる、事理の顛倒定に極まれり、而して彼等一たび歸朝の後は徒らに米國開教師の標目を掲げて大法螺を天下に吹き散らし以て虛名を博せんとすと、如斯にして誰か彼等を眞の宗教家といはんや嗚呼現時在米の吾人同胞の要求は眞正なる宗教と徳望ある教家を俟つこと急なり、起てよ母國の傳道者、なんぞ來りて吾人の要望を充たさるる

漫 評 和氣 容 廣 道 人

基督教が平和を主張し、慈善を實行しつゝあるは感ずべき所であるが、去る五月の新聞紙上に、陸軍大臣の内訓なるものを見た、曰く日露戰役の際基督教徒と社會主義者が、最も卑怯なる振舞が多く、又或大隊長が、基督教を信じその部下を擧つて信せしめんとしたのを知つて、大臣は直に嚴訓を發したとあつた、かくては基督教もお里が見へ透くではないか

駿河臺なる正教會本部に於ては、三十餘名の日本人傳教者を免職せり、是れ露國は本來有事の際に、宗教を利用して爲すあらむとしたが、日露戦争の結果全く彼れは失敗に終りたれば、日本の傳燈を縮少したるものなりと、果して眞乎、彼の基督教徒の宗教策は曾て史上にも之を見る、豈過去のみならんや、獨り露のみといはんやである

八品派の施本に因果論といふがある、惣てね座に出すべき所論ではないが、その中に八品は本迹一致絶待の上の而も相待勝身を正意とすといふ一文がある、絶待の上に相待を立るとは、頗る面白い論法ならずや

韓國皇室は迷信を退けたと聞いて、我國民が之を喜ぶは不可なし、されど喜べる人、多くは迷信家に非ざれば邪教徒なり、予はその喜べる所以を知らず、指導國民たるもの宜しく反省すべきである

又彼の一進會の意見書中に、國內の淫祠を廢止したとあるが、日本も韓國の次には之れを實行して貰ひたい

宗門史料

左の一節は「常樂篇」中の一文にして、大日本史料(第十二編の五)に載録せられたるものなり

日經上人師弟六人院日號、并遷化之年月之事

元和六年庚申十一月廿二日

權大僧都法印常樂院日經上人法難後越中正願寺于今爲開山也

慶安元戊子八月廿日

京五條上行寺

丹州知見谷本妙寺 開山

兼智院玉雄日秀上人

京都久遠寺 開山

尾州常樂寺

正善院交源日壽上人

京本正寺 開山

長遠院可圓日顯上人

若州本行寺 開山

佛乘院隣碩日玄上人

備前本行寺三世

本行院玄聰日堯上人

法難之理即日化

右之外日啓日要等之弟子有之也

皇州環安行寺開山

經聖師初當國下向并當山

族譜(本書序文に「族譜者本師正教之」)五(初編)曰傳聞、常樂院

日經上人と申は、京都妙福寺廿六(也)代之任職にして

京東山上行寺、河原本正寺の開祖也、慶長の比、經師

法難にて京都追放あり、其時師弟六人、三條河原に引

渡し、辻々にて其罪を呼りける、經師見物の諸人に向て曰、高祖已來、法義之爲に不惜身命の行者なり、題目を信心に可唱、盜賊の類はと不可宣と思ひし也、此時宗味公は(本師基右衛門事也、急公の二男なり、(本書序文に「木時宗味公は時宗意、當本時師之元祖也、法難當在院日經居士也」)とあり二十三歳なりしが、始終御供ありける、經師はそれより丹波國八原村に趣き給、其邑に掃部と云六百姓に、信者ありて奉介抱、故に經師此處に留杖而教化し玉ふに、郷人踴伏するが故に、一字御建立あり、今の西畑本妙寺是なり、彼掃部子孫者、同村に今は久兵衛と申者也(注文)又曰、經師丹波の八原に御座在し比、小濱にて宗味公、伏原村孫右衛門與西津喜右衛門心を合せ經師を請待す、依之若狭初て下り給ひ、町家にて説法し玉ふ、其法談は本迹勝劣之法問也、于時聽聞に集る法華宗門之者は、多分長源寺之檀那也しが、聽て經師を信ずる者あり、又誇り惡める者もありける、爰に長源寺より、經師は蒙天下御勅氣僧也と、頻りに公所へ言上あり(本書の序文には「蒙天下之御勅氣」)殊に京極の家士に熊谷主水と云人、大に經師を惡み、其法筵を妨げる故に、小濱に逗留し玉ふ事僅に三日計にて、當國退出在て、越前文越き玉ひ、それより加州を渡り、越中に趣、兩國に各一字を(金澤本覺寺と建立し玉ふと也、左

れば小濱におゐて、經師踴伏の者多く有之といへ共、恐公制憚見聞、皆長源寺に歸檀せり、只宗意公之族類耳、信厚改る事なく、就中宗味公は度々召出公所、雖有制之、終不捨信、經師之門札不下也(中)其後京極家に、中主膳と云信心者出來たる故、公邊も少々緩かせに成しゆゑに、常樂寺之一字を企る也(注文)復族譜曰、經師法難之砌より、宗味公一向隨從し玉ふ故、宗意公者公儀表を憚り、暫く長源寺に歸伏有ける處に、宗味公は妻子を捨、伏見に行、三年の間經師に隨身有之しと也(中略)其の後、公邊緩く成しゆへ、宗味公歸國せらる、其後自經師贈引導、授與妙是給、此の卷四十年以前迄、本行寺にありしに、紛失せしか不見也(已上)延私云、經師之事蹟、自幼年之節、師範並先哲諸者之物語、雖三屢聞之、未下于伏見聞か止住之事也、但た法難之砌、東寺九條邊に信伏者有て、川原より直に誘上り、暫く奉入置土藏之内、加療養也此の人は九條殿之御家人にて、其子孫者京都之町家に住して、于今商人成由、申傳へしか共、其の姓名初より未詳(今族譜の傳説とは小異なり、(中略)日經自筆)本尊傳書、師弟六人の別の事をもせ(授與之施主釋)當山什物に昨入齊信士、此施主以無二之志調藥方(略)當山什物に經聖之曼茶羅數ある中に、一遍首題に御名判、左右一行宛寫書あり、右の方には慶長十四年二月廿日六條川

原之法難を示し、左の方には昔に慶長十六辛亥年夏頃、凌北國翰難之山海中正坊依法難流浪之憂悲、問訊之志、書之授之、慶長十六年七月廿八日、中正坊日要に與之、於建仁寺書之とあり、此臨書之北國之語者、正く山城より指玉と語なるべし、況亦於建仁寺書之とあり、建仁寺者餘國に有建仁寺號聞ず、京都東山之建仁寺に決せり、以之思之、法難之節より丹州に下向在て、後當國より加越に赴玉ひたれ共、金澤本覺寺開基後に、或造之節上京在て、伏見又は九條邊に暫く杖を止め給事有之乎(略)加州金澤本覺寺の什寶に、經師自筆之寫本あり、其書筆箒を思わかり、從古、本覺寺の黒筆箒と唱て、自他宗僧俗迄、開傳て大切なる什本也と云、左れば住持之外は、雖、爲門中僧、不許他見、無住之節者、開基檀頭三輪氏千石封印して預り來れり、世評に謂、其書は本迹の秘抄にして、假令初心淺識之僧たり共、一見すれば直ちに奥旨を領解し、得意するといへり、予彼寺暫在務之暇、拜之全非本迹抄、全部五十卷、經筆眞筆、而書量品の私記也條々に本迹を讀一々藤科文、細科註尺する事、宛如銀盤盛ニ珠玉、其外に四帖抄五帖抄と云る寫本あり、是は八品門流にて、隆師之撰として、大に秘して全本迹之様に云觸れて賞翫す、此

亦曾て本迹之法門にあらず、五時八教之諸法相を呈示する也、其卷尾に常樂院日經と有て、予只一見して不淺得る故不攝州尼崎本興寺に、爲弘通一寄宿等之御事が有之と覺へたり、然れば件四帖五帖抄者經師本興寺寄講之節、會下之僧徒に教授之抄と見へたり(略)經師者其代に宏才也、彌三頌德之名譽自宗他門一歎故に、經回之處には留て而聽講、或は請して而可成、稟三教授、仍而不限建仁寺、學生集會する諸山法窟、遍歴し玉ふ事無疑者乎(下略、常樂寺、及び本行)(寺開基の事における)

顯本宗務廳錄事

- (二等) 東京府妙國寺住職 大僧正 本多 日生
- (同) 岡山縣本蓮寺住職 中學統 梶木 日種
- (同) 東京府本榮寺住職 權中學統 田久保日城
- (同) 大阪府堂閣寺住職 同 古谷 養眞
- (同) 福井縣信行寺住職 同 木村 日順
- (同) 静岡縣妙隆寺住職 同 譽 蘭光
- (同) 福岡縣本泰寺住職 同 學士 吉塚 通榮
- (同) 山口縣秋林寺住職 同 吉田 義掌
- (三等) 兵庫縣圓乘寺住職 權僧都 能仁 壽明
- (同) 大阪府法華寺住職 中學統 葦名 玄鏡

(同) 岡山縣本成寺住職 同 原田 容廣
 (同) 同 縣本經寺住職 權中學統 高田 日暢
 宗門公共ノ事業ニ對シ特殊ノ功勞アルヲ以テ宗制褒賞令ニ依リ(三)等功勞章ヲ授與ス
 明治四十年九月十三日
 顯本法華宗管長 大僧正 本多 日生

岡山縣本蓮寺住職 中學統 梶木 日種
 東京府本榮寺住職 權中學統 田久保日城
 宗門公共ノ事業ニ對シ特殊ノ功勞アルニ依リ僧階三級ヲ陞進セシメラル
 叙權僧都 岡山縣本蓮寺住職 中學統 梶木 日種
 權大學統 東京府本榮寺住職 權中學統 田久保日城
 以上四十年九月十三日附

雜報

●第二回東部講習會 昨年はその第一回を千葉縣東金町西福寺に開設せられたるが、本年は全縣大綱町連照寺に於てその第二回を來る十月一日より七日間開設せらるゝととなり、その旨一般に告示せられたり、今其要點を擧ぐれば左の如し
 一、講演は毎日午前八時より正午までとし、午後一時より三時まで、全六時より七時まで、科外講演、輪講若くは討論、但し時宜に依り伸縮ある事

一、講師は阪本、錦織、小林、本多の四大僧正と野口僧正にて、已に講題の決定せるものは、錦織師の當體義抄講義、本多師の關日抄講義等なり
 一、講習會事務所は連照寺に置き、來會者(並に宿泊者)は開會前日迄にその旨該事務所に出づべき事右に付野口義禪、萩原啓門、草切榮玉、稻葉知勇、小竹俊雄の諸師その準備委員を命せられたり
 ●千葉縣支學林 全支學林長は去る八月中旬大僧正錦織日航師に任命あり、爾後若々諸般の設備を進めつゝあれば、來る十月月上旬には定めて開林の運びに至るべし
 ●東京弘通所の水害慰問 八月中東京市附近に於ける水害の慘況は、新聞紙上に詳報せる所なるが、同月二十六日以後同市淺草區新福井町顯本法華弘通所に於ては詰員熊井本光師を始め高木松太郎、信徒増田松治、山口鏡太郎、根本福太郎、堀越宇三郎等の諸氏相率ひて本所、深川、淺草を始め被害地に慰問を始め、山谷、入谷、箕輪、日暮里、千住方面迄出張し、慰問の傍ら出張警官を補助して被難者の救護にも努めたり 因に同弘通所は近年日を追ふて盛況を呈し、已に去る六月中に居室の建増周圍の板塼を改築する等の舉あり、又青年團體の宗義研究としては前記熊井師を始め櫻井、野間、高見澤、大橋、山田、加藤等の諸氏孰れも熱心に精勵し、毎月八日十八日廿八日は午後一時より三日十三日廿三日は午後七時より例會の説教演說會ありて、主

教大僧正小林日至上人を始め山名木信、高島音吉、小島傳次郎、前記増田、山口、及び青年團の諸氏出演すと云ふ

●總本山の水害慰問と追弔會 京都總本山妙滿寺に於ては客月中全國各地水害死没者の爲めに、九月一日午後二時より嚴肅なる追弔法要を営み、且つ福知山、綾部、園部等、京都府下の被害地に慰問使二名を特派し、尙ほ本山より金貳拾圓を、山内及び近末寺院より若干金を醸出して全地日出新聞社に托して遭難者に義捐したり、右慰問使の報告を得たれば左に摘録せん

今回府下水害地を本山慰問使として、去る二日早朝園部へ向ひ、郡長、署長、町長の諸氏に面會の上慰問の辭を述べ、町家をも慰問、翌三日拾貳里餘の徒歩にて綾部了圓寺着、總代諸氏にも面會致候、同地は最も水難は少なし、五日福知山へ向ひ、役所等を訪問の上、町家數十軒慰問候處、今回は未曾有の大洪水なれ共溺死者は極めて少數にて不幸中の幸なりと申居候、六日無事歸山致候、目下大覺青年會の催しにて同情袋壹千枚餘を京都市民に配布致し、尙ほ來る十二日午後七時より報告大演說會開催の都合にて準備中に候、又た十三日頃よりは道路布教隊を出たし募集の豫定に有之納等もその内に加はり申候、今回の慰問使派遣は我が本山が最初にて、九日より本願寺の慰問使出發の趣に候、云々(總本山妙滿寺慰問使銀井乾升、同鈴木孝碩)

れて候、一夜その演說會に參臨候に吾人本化の聖教を耳にせる者は、是れ一説一語物たらの心せらるゝは、敢て怪むに足らずと存候

因に南山君は商業觀察上の都合に依り、去る五月廿一日ハンホードを發し同廿九日シヤトルに移居し、此處に去る二月中より移住せる岡山篤信會米國支部幹事たる大岡福造君と共に同地在留の本宗信徒を糾合してシヤトル支部を經營せんとしつゝあり、又ハンホードにては支部長板野 幹事今井の兩氏に依りて益々教光を放ちつゝありと云ふ、今南山君の所在を録して誌友に告げん

T. Yokoyama.

% J.apanese Club.
No. 414, 5th Ave.

Seattle, Wash.
U. S. A.

●教學財團彙報 教學財團寄附金送納者の注意條件を品川支所より聞き得たれば参考の爲め左に掲げん

教學財團翼賛員申込表

(明治四十年八月三十一日現在)

會員	名譽會員	護持會員	正會員	通常會員	贊助會員	會員ニ入	合 計
府員	有功會員				ラザルモ		
縣別	特別會員						
東京府	KaHIO・00(10)	1E1H・00(14)	EKO・00(14)	1IK1・00(102)	455・50(10)	1491・50(6)	1・110K・00(118)
神奈川縣	KaHIO・00(10)	40・00(1)		140・00(14)	114・00(4)		1144・00(114)

●姫路立善婦人會 全會は去る八月四日正午より妙立寺に於てその第二回を開き、會長野老乾爲師は「人は活動すべきものなる事、又完全なる宗教に依り與へられたる自覺に基かざる活動は人間の眞價を知らざるものなり」との講演あり(その講演は會式分をも餘興には三宅久子、同秀子の彈琴、三宅奈良枝、同久子の琴と古谷こと女史の三絃の合奏ありて盛會なりき、當日全地師範學校長野口授太郎氏を招聘して有益なる講演を聴くべかりしが、出席なかりしといふ、又第三回は九月一日に開く筈なり)

●北米短信 岡山出身の誌友南山横山鐵太郎君より記者の許に寄せられたる北米の短信一二を紹介せん 萬國基督教青年大會やアリス大將歡迎の聲は日本の國民が宗教思想の拙劣を示現せるものと存候(中略)尾崎市長がアリス大將を日蓮上人に比して云々したるが島田二郎君が「アリス大將でもないアリスを本化聖教の鏡にしては現代の人々が心驚愕のさまや未だし、昔の日星の光り知らぬ宗教に對する盲目に候、

これを米國民に觀るに先般アリス大將が渡米せる折何の音沙汰もなく平氣に候、素より彼アリスは單に一の事業家中の好運兒と稱するに止りて、彼れが基教の或る一面の動機に則り巧に世を渡るを寧ろ卑下し、救世軍と云へば米人はフーンと鼻の返事にて、立派なる基教あるに敢て彼等に事業を托するの要なしといふ風にて候、此點に於ては我國民より寧ろ西洋人の宗教思想が確乎たるやの思ひせられ申候 先日當地に萬國基督教獎勵會が開かれ、岡山よりも澤谷先生が渡米

一、教學財團基金を京都本部へ納附する際は、必らず納金者の氏名等を明記すべき筈なるが、中には振替貯金用紙の表面に合金額のみを掲げ、その納金者氏名等不明のものあり、爲めに問合をなす等相互の間に手數と日子を要するに依り、送金者は振替貯金用紙裏面の通信文欄に必らず表記金額の納金者氏名、金額、納金回数(初回又は幾回目)を明記すべき事尤も多數の爲め記入し得ざる場合は「表記金額の内譯は品川支所へ別報す」の旨右欄内に記載して本部に送金し、同時に品川支所へ右の明細書を送附すべき事

一、即納申込の會員中納金未済の向は、速に納金方取計の事、又月掛け納金若くは時々納金ある際、取扱者はその時々送金するか、少なくとも一ヶ月毎に打切りその集りたる分を本部へ送納すべき事 ●教學財團の現状 千葉縣下は本月一日より檀信徒一般に對し大勸募に着手するととなりたるが、八月末日に於ける勸募の成績は左表の如し

千葉縣	五五五・〇〇三	二七〇・〇〇二	一一八・〇〇三	二七〇・七五二	九〇〇・五八七	五〇〇・〇〇四	一一二・八四三
茨城縣	一〇〇・〇〇一		三〇・〇〇一	一七〇・〇〇一	二五・〇〇一	三〇・〇〇一	三〇・〇〇一
栃木縣				四五・〇〇一			三五五・〇〇一
福島縣	一〇〇・〇〇一			七〇・〇〇一	五六・〇〇一		四五・〇〇一
山形縣				一五・〇〇一	六〇・〇〇一		二二六・〇〇一
靜岡縣	五〇・〇〇一			二五・〇〇一	六四九・〇〇三	三〇一・〇〇四	二二六・〇〇一
愛知縣	三五〇・〇〇三			四六二・五〇七	九四九・四〇五	三〇・〇〇一	二二六・〇〇四
三重縣				九・六〇七			一九八・九〇六
岐阜縣				一〇・〇〇九			九・六〇七
京都府	八〇〇・〇〇八			一〇一・五〇三	一〇・〇〇九		二〇・〇〇九
大阪府	六〇〇・〇〇五			一八・五〇二	八〇・〇〇三	三五〇・〇〇三	五二一・五〇八
兵庫縣	九七五・〇〇六			二六五・〇〇二	六三・〇〇一	一〇〇〇・〇〇一	一九一・八五〇
岡山縣	二九〇・〇〇六			一〇五・〇〇〇	八五九・六五三	二二〇・〇〇二	一〇・六七三
鳥取縣	一〇一〇・〇〇三			九〇・〇〇〇	六〇・〇〇一	二四六・〇〇三	五五七・四六五
廣島縣	七〇〇・〇〇六			八九〇・〇〇七	三九六・九五二		一〇・三七六
山口縣				一五八・〇〇一	三七・四〇二	八〇〇・〇〇二	二五九・九五二
福岡縣				三〇〇・〇〇一	一〇九・〇〇二		一一八・五〇四
福岡縣				一八〇・〇〇一	三三・四〇二	三三九・〇〇二	六四四・〇〇二
石川縣	一〇〇・〇〇一			一〇・〇〇一	一〇一・五〇三	八五・〇〇四	一九七・六五〇
合計	三七三〇・〇〇五	四四八五・〇〇八	二六三三・〇〇八	八三二・七五六	五六一・二三三	八三九四・五〇二	六七〇二・四八三

備考 本年三月日未現在ニ比スレバ人員ニ於テ七二六人(二割八分)、金額ニ於テ九九三二・一〇(一割七分)ヲ増加セリ

教學財團基金寄附申込表

(第十一回)(品川支所取扱)

金六拾八圓(第二回)	靜岡縣吉美養仙防住職野中通玄	金壹圓五拾錢	今井 千藏	金壹圓五拾錢	今井 半吉	金壹圓五拾錢	池田 寅吉
金六拾圓	千葉縣長生郡新治村柴名	金壹圓	山崎金一郎	金壹圓	今井 清藏	金壹圓	三橋甚七郎
金五圓	全縣山武郡土氣善勝寺檀家	金壹圓	今井 清藏	金壹圓	三枝勝五郎	金壹圓	野中 仁太郎
	千葉縣千葉郡生實濱野村本満寺檀家(初回)	金壹圓	三枝 勝造	金壹圓	內山久之助	金壹圓	野中 市藏
金貳拾圓	今井喜代太	金拾貳圓	森 隆三	金壹圓	松田七十七	金壹圓	三枝喜惣次
金拾貳圓	今井喜一郎	金拾圓	森田庄太郎	金壹圓	池田愛二郎	金壹圓	森田 廣
金八圓	森田 七藏	金拾圓	森 文太郎	金壹圓	角川喜三郎	金壹圓	及川喜十郎
金五圓	森田佐七郎	金七圓	宇野澤半七	金壹圓	齋藤松三郎	金壹圓	三枝 吉郎
金參圓五拾錢	篠崎 幸福	金參圓五拾錢	篠崎太郎	金壹圓	廣島縣吉田町蓮華寺檀家	金壹圓	高木 米藏
金參圓	鍋木喜三郎	金參圓(即納)	內山忠太郎	金壹圓	東京市小石川常檢寺住職	金壹圓	山崎健次郎
金貳圓	森田 織藏	金貳圓(即納)	野中昇一郎	金壹圓	全 牛込久成寺信徒	金壹圓	住吉 太郎
全	森田幸三郎	金貳圓五拾錢	同 貞次郎	金壹圓	東京市浅草善仙院	金壹圓	小金井明徳
全	森由 太郎	金貳圓	森田 忠助	金壹圓	全 市 全寺 檀家	金壹圓	川上 隼人
全	角川喜三郎	全	森 富藏	金壹圓	全 訂正 六月報告本表中讓持會員稻葉顯正とあるは、	金壹圓	石川 徳治
全	若菜庄四郎	全	今井幸次郎	金壹圓	秋葉、七月分賛助會員小原邦憲とあるは邦憲、八月	金壹圓	檀 家 中
全	渡邊 久藏	全	池田榮太郎	金壹圓	分濕津本泰寺檀家高名甚五郎とあるは高石の孰れも	金壹圓	
全	稻生甚三郎	全	今井 逸作	金壹圓	誤	金壹圓	
全	山崎 文平	全	鈴木 龜藏	金壹圓		金壹圓	
全	今井七太郎	全	深山由太郎	金壹圓		金壹圓	
全	金壹圓六拾錢秋元 次郎	全	金壹圓六拾錢秋元 袈裟治	金壹圓		金壹圓	

全	增田 千藏	全	稻生 常吉
全	山崎金一郎	全	池田 寅吉
全	今井 清藏	全	三橋甚七郎
全	今井 清藏	全	野中 仁太郎
全	三枝勝五郎	全	野中 市藏
全	三枝 勝造	全	三枝喜惣次
全	內山久之助	全	森田 廣
全	松田七十七	全	及川喜十郎
全	池田愛二郎	全	三枝 吉郎
全	角川喜三郎	全	高木 米藏
全	齋藤松三郎	全	山崎健次郎
全	廣島縣吉田町蓮華寺檀家	全	住吉 太郎
全	東京市小石川常檢寺住職	全	小金井明徳
全	全 牛込久成寺信徒	全	川上 隼人
全	東京市浅草善仙院	全	石川 徳治
全	全 市 全寺 檀家	全	檀 家 中

教學財團基金寄附受領表

(第十回)(京都本部取扱)

發賣書目

文學博士 三宅雄次郎君序 (既製發賣)
大僧正 本多 日生師編

法華經講義

和裝鉄入全八冊洋裝背皮全二冊 正價金四圓
郵税金二十錢 臺灣韓五十錢

古今東西の法華經觀を網羅し特に天台と日蓮との創見を發揮して更に新考案の下に佛教の積極的統一主義を闡明したるは本書なり

大僧正 小林日至合著
大僧正 本多日生

顯本法華宗綱要

和裝全一冊 正價金參拾五錢
郵税金六錢

顯本法華宗義の全概を知らんと欲するものは是非本書を一讀せらるべし

顯本法華宗務廳發行

顯本法華宗宗制

全一冊 代金拾七錢
郵税金二錢

附 寺院住職一覽表
全宗現行の諸則寺院教師等詳細に記載しあるを以て其大勢を知らんと欲せば一本を購はるべし

發行所 東京市淺草區南松山町四十五番地 統一團

再版出來

文學博士 姉崎正治君序 (既製發賣)
大僧正 本多日生師編

聖語錄

洋裝九百頁 特製金壹圓拾錢(目下品切)
並製金八拾五錢 郵税金八錢

法華は佛教の綜合歸一を宣し、聖祖は各宗の積極統一を唱へたるもの、その教義の深遠に且多方面にして、眞意を正明に會得し難きは、實に宗の内外に於ける古今の嘆聲なりき、本書は法華の三部及祖書全集に就て之を整然たる組織の下に類聚編成せられたるもの研究の士も布教者も、信徒も必ず一讀すべき日宗の聖典なり、今回は誤字を訂正し紙質を改良し、裝釘又大に面目を改めたるを以て其厚さ初版の約三分二となりたれば携帶に至極便利なり

發行所

振替貯金 四九六〇 須原屋
全淺草區南松山町四十五番地
一二一九

再版出來

統一團

廣告料	一	頁	半	頁	四分ノ一頁	特別廣告
	拾	圓	六	圓	三圓五拾錢	十五圓ヨリ 廿五圓マテ

一本誌は毎一回十五日を以て發行期日とす
一本誌は一冊六錢、十二冊前金六十五錢、郵券代用は一割増但、限切手を可とす
一購讀申込の節は住所姓名を附書にて認めらるべし
一本誌代金補込は振替貯金に依らるゝを最も便利とす、補込用紙は最寄郵便局に請求し受取らるべし、但し此の場合には誌料の外に金紙錢振替手数料を添へられたし

明治四十年九月十五日印刷發行

發行所 統一團

發行人 井村 恂也
編輯人 山根 顯道
印刷所 鈴木 木 暲 學
印刷所 北澤 活版所
東京淺草區南松山町四十五番地

統一

第五百五十二號

明治三十年二月二十四日 第三種郵便物認可 (每月一回)
明治三十年九月十五日發行 統一 第五百五十一號 (十五日)

發行所 東京淺草區南橋 (原野村全館) 統一團
山町四十五番地 (原一二一九)